

日  
々  
の  
色

暮らしのエッセイ



## はじめに

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL）は、1986年の設立以来、生活者の視点に立って、「エネルギー・環境」、「住まい・生活」、および「都市・コミュニティ」の三分野で、社会・生活・文化に関する調査・研究を行い、その成果を発信しています。その情報発信の一つとして、各研究員が、自らの研究テーマの視点あるいは一生活者の立場から、暮らしにかかわる話題を「半歩先のライフスタイル」というコラムとして、ウェブサイトに掲載してきました。

2013年の春、毎日新聞様が大阪本社発行の夕刊に、新たに「暮らし・生活」をテーマにしたページを設けられ、その中のコーナーで外部の執筆者によるコラムを連載されることになりました。日頃から「半歩先のライフスタイル」をご覧になっていただいていた担当の方が、その内容が新しい企画にぴったりであると感じられ、生活者向けに執筆してほしいと依頼して来られました。期待に応えられるだろうか、一抹の不安はありましたが、こうして4月からコラム「日々の色」がスタートしたのです。

CELの研究員が交代で、ライフスタイルや住まい、健康、食、子育て、街、自然、季節、省エネなど幅広いテーマで話題を提供してきましたが、そのコラムが2013年4月から2015年3月までの2年間で約50本になったのを機に、今回、小冊子にとりまとめ発行することにしました。

この冊子が、みなさまの暮らしの中で一服の清涼剤となり、またクオリティ・オブ・ライフを向上するヒントになれば幸いです。

2015年3月吉日

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL）

所長 木全きまた 吉彦

# 目次

はじめに	1
この若木が育つころ	4
小さな集いで「家すつきり」	5
鳥や虫 呼び込む緑	6
陰影ある豊かな空間	7
オダサクに学ぶ「わがまち」	8
低山もまたよろし	9
七夕の夜 星に願いを	10
子どもカレーが大変身	11
歴史と風土を肥やしに	12
変わりゆく「縁」	13
ペットとの暮らしの重み	14
語って育む地域愛	15
思わぬ1冊との出会い	16
海と共にスロー、スマートに	17
子供への言葉	18
今日から「いつもありがとう」	19
「今昔」で未来を媒介	20
「誰か」のためのクリスマス	21
再び、共に「日本発見」	22
昔ながらの食と文化 次世代へ	23
暮らしを守る英断	24
互いにやり取りし合うことで	25
心のための食	26
旧暦で学び楽しむ	27

移ろいめぐる日本の心	28
まち支える公共交通	29
カツオの季節到来	30
多彩な文化体験、そばに	31
あれから20年余	32
水と緑の国	33
海に感謝し支え合い	34
涼を感じる省エネ対策	35
小夏の思い出	36
安心して預けられる社会に	37
リフォームと暑さの関係	38
シンプル・イズ・ベスト	39
第3の人生 どんな「林」で	40
リフレッシュ まずは散歩から	41
謎解きラリー 船場で	42
懐かしい影絵の世界	43
郷土料理、守り伝えて	44
小さな手助けつなげ	45
冬至より春を待つ	46
季節を感じる住まい	47
新たな食との出会い願ひ	48
宝探しに春山へ	49
暮らし見直し、アレルギー軽減	50
春野菜にほころぶ	51
大阪繁栄の土台、記した画家	52

## 日々の色

関西各地で桜が満開となった今週、入学式や入社式を迎えた人も多いのではないでしょう。一部の大学では秋入学への移行に向けて準備を行っているようですし、企業の中にも新卒一括採用から通年で採用する仕組みに変えるところが出てきました。しかし、春4月、満開の桜の下で新たな生活をスタートできるのは、日本ならではのすてきな巡り合わせです。

とりわけ、新入の小学1年生。入学式を終え、真新しいランドセルを背負って、着飾った母親と手をつないで歩く——誰もが思い描く日本の春の風景です。

桜の花言葉は「優れた美人」「純潔」など多数ありますが、そ

## この若木が育つころ

の中に「豊かな教養」「善良な教育」というのもあります。花言葉に「教養」「教育」というのは意外な感じですね。その由来は分かりませんが、「元気に育てよ」と親子を見下ろす、桜の思いを表現したものでしょうか。

小学生の数が最も多かったのは1958年の1350万人。それが昨年の680万人にまで半減しています。今年の1年生は06〜07年生まれの100万人余り。昔に比べると兄弟姉妹も少なく、親や祖父母の愛情を一身に受けて育ってきた彼らが卒業して社会人となるのは2030年ごろです。

2030年と言えば、昨年、再生可能エネルギーや原発など将来の電源構成について国民的

議論が行われた際のターゲットの年。3人に1人が65歳以上となる超高齢社会も到来します。次世代を担う子供たちに、桜の思いが届き、立派な若木に育つまでに、大人が答えを出さなければならぬ問題がたくさんあります。

私たちの研究所は86年の設立以来、生活者の視点に立って「エネルギー・環境」「住まい・生活」「都市・コミュニティ」の三分野で調査・研究を行い、その成果を発信しています。このコラムでは、各研究員が暮らしにかかわる話題をご紹介します。

(木全吉彦)

## 日々の色

来週末にはゴールデンウィークが始まります。久しぶりに友達に会いたい、すっきり片付いた家でのんびりしたいという方も多いのでは？ そんなあなたにお勧めなのが、少人数の友達を家と呼ぶこと。「人の目」をうまく使って、家をすっきり片付ける効果が期待できます。家が片付いてから、なんて言っているといつまでも人は呼ばれません。できるだけ早く約束してしまうこと。前半の3連休に招くには、今週末がチャンスです。

目的は「家をすっきり片付ける」ことですが、そのためにはお客様を厳選する必要があります。義理のお付き合いや、大人数の集いは逆効果となりがち。一緒に食事をしたい、おしゃべり

## 小さな集いで「家すっきり」

がしたいと心から思える方を数人に絞って頭に描いてみましょう。約束ができたなら、持参してもらおうものをリクエストするのもいいもの。料理自慢の方には得意料理を、野菜作りが趣味の方には手作り野菜を……とリクエストします。

そして当日活躍するのが、大皿料理。日本の伝統的な配膳法（1人前ずつ盛り切り）より気軽に、和気あいあいと食事ができます。この大皿料理、中国の禅宗の一派の食事様式「普茶」がルーツともいわれます。また大皿やバナナの葉などに料理を盛る歴史は古く、ヨーロッパでは古代ギリシャやローマ時代からあり、貴族たちは横たわって手づかみで食べていました。

だからというわけではないでしょうが、大皿に盛り込む料理は、手でつまめるものも人気です。そして、生ハムやチーズなど盛り付けるだけでよいもの、煮物やサラダなど作りおきができて冷めてもおいしい料理、サンドイッチなど人数調整ができる料理と考えていきます。さらにスープなど温かい汁物で満足度がアップ。ケーキやクッキー類は多めに用意して、残ればラッピングしてお土産にします。

経験から「家のすっきり」効果は集いから約3週間。これで後半の4連休もすっきり片付いた家でのんびりリフレッシュできること請け合いです。

(山下満智子)

## 日々の色

新緑がまぶしい季節を迎え、自宅の庭にもさまざまな色の花や葉が見られるようになりました。先月は、トキワマンサクが紅色の花を咲かせ、隣でサンカクバアカシアが明るい山吹色の花を付け、鮮やかな色のコントラストを見せてくれました。

もうすぐ、ソヨゴとシマトネリコが小さな花を咲かせてくれるそうです。風に吹かれて草木の葉などがかすかに音をたてて揺れ動くことを「そよぐ」と言いますが、ソヨゴの語源にもなっているそうです。風に揺れやすく、確かに微風でもカサコソと音を立てます。昔の人がいかに自然に注意深く接していたことを示しているように思います。シマトネリコの近くには鳥の

## 鳥や虫 呼び込む緑

餌台を置いています。市販の小鳥の餌を、週末に1回置く程度ですが、餌を置いたことを鳥がとでも早く感知するので驚きます。やって来るのは主にスズメ。シマトネリコの枝にとまり、安全を確認してから餌台に來ます。野鳥に餌台は不要との意見もあります。しかし、たくさんのおスズメが来るのが可愛らしく、楽しくてやめられません。先日、違う鳥が来るかもしれないと、パンくずを置いてみました。すると、やって来たのは、何とヒヨドリ。同じ自然の中で生きる鳥なので差別してはいけないのですが、攻撃的な性格なので嫌われがち。結局、私も元の餌に戻してしまいました。家の周りに木や草があると目

や心の安らぎになる半面、メンテナンスが結構大変です。コンクリートやタイルで覆うことも多いようですが、それでは、蝶などの昆虫や鳥といった小動物も呼び込めません。また夏場には、多少なりとも涼しい環境が期待できるので、生物を意識した緑化を心掛けたいものです。ところで、野鳥の専門家にかがうと、餌を置くのは、冬の時期だけにした方がよいそうです。春から夏は、野山に餌となる虫や実がたくさんあるので、人工的な環境に呼び込むのはあまりよくないとのこと。しかし、スズメたちが来なくなるのを考えると寂しく感じられて……。

(志波徹)

## 日々の色

大阪ガスの実験集合住宅NEXT21(大阪市天王寺区、18戸)という建物で、「居住実験」を担当しています。社員やその家族らが一定の期間居住し、省エネ効果など各種機器のデータ収集の他、「未来の住まい方」を探る調査なども行っています。以前、その集合住宅のある住戸の前で、住人の女の子が大声で泣いていました。

訳を聞くと、お漏らしをしてしまったようなのです。しかし事態はもう少し複雑でした。下着を替えなければならぬ。下着は家の2階にある。両親は留守で、誰もいない家の2階には、怖くて上がれない。お姉ちゃんは先に遊びに出ってしまった。私も遊びに行きたい。でも下着

## 陰影ある豊かな空間

を替えなければ出られない。しかし怖くて上がれない……。彼女の家は上下階にまたがるメゾネットタイプで、マンションや団地の集合住宅では珍しく2階がありました。「じゃあ、一緒に行ってあげるね」。彼女の顔はぱつと輝き、無事に下着を替えると、お姉ちゃんを追って飛び出して行きました。私には懐かしい感情が残りました。私の実家は京都の、いわゆる町家でした。縁側に隣接したトイレは、夜には暗くて恐ろしい場所となり、子どもの頃は1人で行くことができませんでした。当時感じた、闇や畏怖の念。しかし私にとってはむしろ貴重な体験であり、豊かな空間でした。それが現代の集合

住宅で再現されるとは思ってもやらず、うれしくもありました。彼女の家は、内装が深い海を思わせるブルーが基調となつた、広い住戸でした。照明も少し暗めの大人好みの雰囲気です。NEXT21は階高が高く、メゾネットの吹き抜けは、天井がかなりの高さです。そんな条件が重なり、子どもにとっては少し怖い陰影のある空間になっていったのだと思います。

一般的に、住宅には明るさや美しさ、広さなどが求められますが、子どもの多様で複雑な感情を呼び覚ます、豊かな空間には、陰影や興行きといった要素も大切だと感じています。

(加茂みどり)



「大阪は木の無い都だといわれているが、しかし私の幼児の記憶は不思議に木と結びついてる」。大阪出身で、代表作「夫婦善哉」などで知られる作家、織田作之助（愛称・オダサク）が、昭和19年に発表した「木の都」の冒頭である。神社やお寺の境内、坂道を緑に覆っていた樟や松、銀杏の木々など、生まれ育ったまちへの強い愛着が感じられる一節である。大阪市天王寺区。裏通りに長屋が連なる下町なのに、高台にあるため、上町と呼ばれていること、源聖寺坂、愛染坂、口縄坂など多数の坂が巡っていることなど、故郷を丁寧に記している。

甘い青春への回想、人やまちの移り変わりへの寂しさをつぶ

## オダサクに学ぶ「わがまち」

やく主人公の言葉は、作者の心象風景そのものである。実際に現地に赴いてみると、繊細な感性で表現された木の都は驚くほど名残をとどめていた。舞台となった口縄坂にたたずむと、静けさと澄んだ空気に癒され、新緑のまぶしさのせい、一瞬時空をさまようような、不思議な感覚にとらわれた。

オダサクの作品は、路地裏や盛り場を背景にした、けっして裕福ではない庶民の喜怒哀楽の描写に独特の味わいがある。同時に、長屋、寄席、商店や作者自身も通った、うまい、食べもん屋など、戦前戦後の大阪のまじをそのまま記録しており、地誌としての役割も果たす。自然があふれる寺町、芸能文化が花

開いていた芝居小屋、「赤い灯青い灯」のカフェやサロン。オダサクがもつとも愛し、東京での放浪生活後、息を引き取る瞬間まで、心の根っこをおろしていた場所だったのだろう。

人生の物語を紡いだまち、根っこがあるまちは、離れば離れるほど懐かしく、その価値が再認識されるものだ。今年織田作之助生誕100年。改めて作品に触れると、自分の心の故郷を確かめられる気がする。梅雨の合間に、わがまちの並木道や公園、神社仏閣、あるいは駅前や商店街などをゆっくり散歩してみると、意外なお宝を発見できるかもしれない。

（栗本智代）

富士山が世界遺産に登録されることになりました。ここ数年の登山ブームにもさらに拍車がかかりそうです。

「山は必ずしも高さをもって尊しとせず」。富士山をはじめとした「百名山」もいいですが、標高1000以上のクラスの低山にも捨てがたい魅力があります。それも、六甲山や金剛山といった人気の山を除いたごく普通の山。標高だけでなく、人気も比較的高くない「低山」です。

低山では、多くは木立の中を歩きます。木道や階段はまれで、落ち葉を踏みしめながら土の上を歩きます。登山者も少なく、鳥の鳴き声と風の音だけが響く静寂に包まれます。高山よりも自然に浸れるのが魅力です。

## 低山もまたよろし

低山は高山よりも道に迷いやすく、注意が必要です。登山道や標識があまり整備されておらず、麓で作業道が錯綜していることが多いからです。地図を必ず携行し、要所でコンパスで現在地を確認します。地図上の登山道は主要なものに限られ、実際の位置が違っていたり廃道になっていることもしばしば。登山用のGPS（全地球測位システム）も持参してルートを記録し確認するとより安心です。

このように、低山では主体的にルートを探索しながら登ります。道標に従い前の人についていくだけではありません。自力で登山している気分を味わえるのも魅力です。

低山であっても山は山。備え

を万全にすることは必須です。よく登る大阪・京都両府境のポンポン山は、標高678メートルありますが、冬場、下界は晴れているのに登ってみると一面銀世界などということもあります。強風だと体感温度は氷点下となり寒さに凍えます。一方、これからの夏場は、特に低山では暑さ対策やこまめな水分補給が大切です。お勧めは、早朝の涼しいうちに登り始め、昼ごろまでには下山すること。午後には多い雷にも遭わずにすみます。

「人の行く裏に道あり花の山」。人気の高山を制覇するのもいいですが、静寂の低山を楽しむのもオツなものです。

（鈴木隆）

## 日々の色

7月7日は、日本の五節句の一つ「七夕」です。七夕といえ「ささの」は「さらさら、のきばに ゆれる……」と歌いながら、幼稚園で短冊に願い事を書いてササに飾った記憶があります。私の子どもたちがまだ小さい頃は、家内の父が、毎年実家近くの山からササを切って自宅に持ってきてくれました。子どもたちが、青、黄、赤、白、黒の5色の短冊に願い事を書いて、おじいちゃんが持ってきてくれたそのササに、飾ったの思い出します。私たち夫婦も、一つずつ願い事を書いて一緒に飾ったものです。

娘が保育士をしている保育園では、この時期に祖父母の皆さんを招待し、祖父母交流会とし

## 七夕の夜 星に願いを

て「七夕まつり会」を開催しています。天然竹を使った「流しそうめん」を一緒に楽しみ、お別れには「おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとうございしました」と大きな声でお礼を言っています。ササ飾りをおみやげに渡しているそうです。七夕という伝統行事が、異世代間をつなぐ絆の役目をしています。

ところが、この伝統的な行事も、今は、保育園や幼稚園が中心で、一般家庭ではほとんど見かけなくなりました。子どもたちに限らず、大人も就職や恋愛、健康、仕事などでの願いがあるはず。七夕を機会に、子ども時代に戻り、自分を見つめ直し、短冊に願いを書いてみるのも楽しいではありませんか。

環境省は毎年、日ごろいかに照明を使用しているかを感知し、地球温暖化問題について考えようと、ライトアップ施設や家庭の照明を消すよう呼び掛ける「ライトダウンキャンペーン」を実施しています。特に、6月21日の「夏至ライトダウン（ブラックイルミネーション）」とともに特別実施日となる7月7日の「七夕ライトダウン（クールアース・デー）」には、夜8時から10時まで、多くの施設などが一斉消灯を行います。

家庭の照明を消し、織り姫と彦星が年に1回デートする夜空を見上げながら、短冊に書いた願いを星に懸けてみませんか。

(当麻潔)

## 日々の色

朝のラッシュ時間が過ぎた電車内。ベビーカーを押した3人の若いママさんが乗車してこられた。3人の会話を子育ての頃を思い出して、懐かしくて頬が緩んだ。カレーの話であった。

うち1人が昨夜、中辛口のカレーを作って、子どもが中辛口デビューを果たしたというのだ。興味津々の他の2人のママ。それでどうだったと聞くと、くだんのママ、後が大変だったと浮かない顔だ。中辛口のカレーといっても、ほとんどご飯と具なのだが、初めての辛いカレー。食べてくれたのはいいが、たくさん水を飲んで、久しぶりのおねしょをしてしまったというのだ。それも大量に。耳を澄まして聞いている私にはほほ笑まし

## 子どもカレーが大変身

くても、ママにとっておねしょの始末は大変だ。しかし久しぶりの中辛口カレーは、最高においしかった。そう言ってママの顔が明るくなった。

カレーの語源は、インド南部タミル語のkariで、ソース・汁を意味する、というのが有力だ。18世紀、東インド会社のイギリス人によって西洋に伝えられ、世界中に広められた。カレーは、日本で独自の発達を遂げ、日本のお家庭料理の定番となった。

カレーは、独特の辛み・香りから夏によく似合う料理である。カレー粉の辛みはトウガラシのカプサイシン、黒コショウのチャビシン、シヨウガのシヨウガオール。香り付けはコリアンダーやクミン、黄色の着色に

ターメリック、その他カルダモン、シナモンなど20種類から30種類もの香辛料が用いられる。

辛さや香り、具や煮込み方など、カレーの好みはさまざまであるが、大人と子どもで一番異なるのが辛さの好み。だが小家族の現代の家庭で2種類のカレーを作るのは大変だ。そこでお勧めなのが、ビンダルー・ペースト（トウガラシや香辛料を加えたペースト状のもの）や混合香辛料のガラムマサラ。これがあれば子ども好みの甘口カレーを、大人好みの本格辛口カレーに変身させるのも簡単。少し大きなスーパーや百貨店の香辛料売り場なら入手可能です。

(山下満智子)

## 日々の色

「黒門といえども色はあおによし奈良漬にして味をしろうり」。江戸時代の狂歌師・鯛屋貞柳という人が詠んだ歌です。当時、大坂の玉造界隈で盛んに栽培され、なにわ名産「くろもん」として愛された「玉造黒門越瓜」の存在感が、摩訶不思議な言葉の連なりで、ユーモラスに表現されています。

ルーツは古代中国の越の国が原産地ということで、「越瓜」と書いて「しろうり」と読むのですが、「白瓜」と書くこともあります。それにしても「しろうり」なのに「くろもん」という呼び名の由来が気になります。江戸時代、大坂城の玉造門が黒塗りで別名黒門と呼ばれ、その辺りで作られた瓜だから「くろも

## 歴史と風土を肥やしに

ん」と言ったのだとか。さらに面白いのは「しろうり」でありながら、外皮は濃い緑色をベースに、白い縦縞が数条入る、色鮮やかで粋な姿であることです。実を割ると、白くてきめの整った美しい果肉が現れます。良質の瓜は、江戸時代、玉造界隈に集積していた酒造業と結びつき、名物の奈良漬（粕漬）を生み出したというのです。

時は流れて、今、玉造界隈は大阪の都心部の一角。かつては豊かに広がっていたという畑も酒蔵も姿を消して久しいのですが、2002年に玉造稲荷神社さんの尽力で境内に瓜畑が設けられ玉造黒門越瓜が戻ってきました。毎夏、祭礼に合わせて食味祭も開催され、今年も涼やかな

越瓜料理がふるまわれました。復活から11年、神社の瓜畑から周辺のまちへ、栽培の輪が少しずつ広がっています。といっても、お店の軒下や長屋の坪庭、マンションのバルコニーでの栽培で環境の制約も多く、結実に至るのは容易ではありません。私も毎年苦戦。だからこそ学べることがたくさんあります。

大阪府は現在、17種の「なにわの伝統野菜」を認証。玉造黒門越瓜もその一つです。大阪に限らず、各地に固有の風土に育まれた伝統野菜があります。まちなかにもあっても、足元に広がる大地や歴史とのつながりに気づく格好の素材です。

（弘本 由香里）

## 日々の色

盆と正月が一緒にきたような、といった慣用句を使う人は減りました。しかし、すたれつつある伝統行事が多い中、依然としてお盆は多くの日本人にとって重要な意味を持っています。長期の休暇が取れ、故郷に帰る機会でもあります。

お盆とは8月12、13日ごろから16日ごろまでを指すことが多く、祖先の霊が戻ってくると思えます。地方ごとにさまざまな行事があり、関西では16日の京都五山の送り火が有名です。そのような催しには地域の人たちの協力、助け合い（地縁）が不可欠です。祖先の霊を祀る（血縁）ことと合わせ、1年の中でも「縁」というものを特に強く感じることの多い時期です。

## 変わりゆく「縁」

では、私たちが日々生活するうえでどのような「縁」が大切だと思われているのか。研究所のアンケート（今年3月実施）で、「これからの社会でますます重要になる」ものの候補として地縁（コミュニティや近所づきあい）、血縁（家族や親戚づきあい）、電縁（フェイスブックなどネットワーク上のつきあい）、それぞれについて尋ねてみました。すると、地縁については全体（5000人の回答者）の52.4%が「重要になる」と答えました。血縁は40.4%、電縁29.2%でした。

近所づきあいの希薄化やコミュニティの崩壊などの話をよく聞くので、結果には少し意外な感じがありました。「遠くの

親戚より近くの他人」という言葉はまだ生きているのか。また違った地縁のあり方が生まれようとしているのでしょうか。

この夏も自然災害などに見舞われています。地域の安全・安心への危機意識が高まる中、「地縁」身近な助け合い」というつながりを再構築すべきだという意識が強くなっていると思います。それは昔ながらの地縁とは異なる、現代の意識や生活環境に合ったものであり、地域によってさまざまな形を持つことになるでしょう。少し落ち着いていろいろと考えられるこの季節、自分にとっての「縁」を改めて考えてはいかがでしょうか。

（豊田 尚吾）



## 日々の色

これまでとは次元が違うように感じる暑い夏。エアコンの稼働時間も長くなっているのではないでしょうか。そんな中、背筋が凍るような体験をしました。雌の飼い猫の失踪です。

土曜の夜、妻が外出から戻ると、いつも玄関まで迎えに来る猫が出て来ないと言います。どこにいるの？と聞かれても、留守番役の私は、カーテンの陰にでもいるのだろうと気にしていなかったのですが、さあ、と答えるばかり。慌てて一緒に家の中を捜して回りましたがどこにもいません。どうやら、寝室の窓の網戸を前足で開けてベランダへ出ていた猫に私が気づかず、エアコンをつける時に窓を閉めてロックアウトしてしまったよう

## ペットとの暮らしの重み

です。戻り道を閉ざされ、戸外へさまよい出たのでしよう。その夜は懐中電灯を手に深夜2時ごろまで、翌日曜も猛暑の中、早朝から夜まで近隣を捜しても姿はありません。ベランダの向こうは裏山。時間の経過とともに、このまま野良猫化して二度と会えなくなる、猛暑の中で飢えている、イノシシに襲われて……。あれこれ考え、13年連れ添ってきたこの猫が夫婦にとっていかに大事な存在だったかを思い知り、半ばあきらめながら床に就いたのでした。

間余りをどこかで過ごしたのでしよう。少し小さくなったように見えました。妻の「帰ってきた！」の声を聞いた時の気持ちはどう表せばよいでしょうか。人間同士に比べ、ペットとの関係はシンプルで無私であるがゆえに、尊いものです。折しも9月1日、飼い主にペットを最後まで責任を持つて適切に飼うことを求める改正動物愛護管理法が施行されます。今やペットの数は犬・猫だけでも2000万匹を超え、今後、少子高齢化社会の孤立・無縁化を阻止する有力な手立てともなり得ます。ペットとの「共棲」について考える契機になればと思います。

(木全吉彦)

## 日々の色

「曾根崎心中のお初・徳兵衛の道行は、現在ではどのルートになるのでしょうか」今の通天閣は2代目で、初代はパリの凱旋門にエッフェル塔を載せた形状をしていました。大阪についてこんな話をする、意外と知らなかった。実際に現地を歩きたくなつた。という感想を多数いただきます。

大阪の歴史や文化、エピソードをショートストーリーにして、古地図や戦前戦後の懐かしい写真などを映しながら今日と重ねあわせて語れば、まちの歩みや魅力を楽しく理解でき、地域全体の元気のもとにもなるのではないかと。こう考え、研究の一環として「なにわの語りべ」活動を始めたのが94年のことです。

## 語って育む地域愛

当初はスライド映写なので、電気紙芝居の弁士のような感じです。マイクの前に初めて立った時はガチガチに緊張しましたがお客様からは拍手喝采で自分でも何かの役に立てるとうれしかったのを覚えています。近年はパソコンを使い、ピアノやバイオリンなどの生演奏とのコラボレーションにより表現力を高めることにもチャレンジしています。

梅田の歴史を振り返りながら語る「曾根崎心中考」、御堂筋や地下鉄の開通エピソードを盛り込んだ「大阪モダンズム物語」、かつて暴れ川だった淀川の治水に尽力した「治水翁・大橋房太郎」などの作品があります。さらに活動を大阪だけでなく関西に広げたいと、昨年度は、阪神

間を舞台にした「谷崎潤一郎」愛と創作のジャンクション」を制作・発表しました。

今後は、活動の支援者や制作・出演をしてくれる新たな担い手・仲間を増やしていきたいと考えています。近畿一円のあちこちの小さな空間で、いろいろな語り手がそのまちの物語を楽しく伝え、聴き手と一体となつて、地域への愛着を育みたい。そんな夢の実現に向けて、ちょうどグランフロント大阪のナレッジキャピタルに開設された当研究所の「都市魅力研究室」で秋から行う、語りべ関連講座を企画しています。興味をお持ちの方、顔を出してみませんか？

(栗本智代)

## 日々の色

読書の秋です。話題の新作を  
読むのもいいですが、品切れ・  
絶版となった良書を発掘するの  
も楽しいものです。

学生時代には、東京・神田神  
保町の古書店街へ毎週のように  
通っていました。界限に1000  
店以上が集まり、世界一の規模  
です。今は亡き評論家の植草甚  
一さんには及びませんが、店ご  
との得意分野、書棚の配列まで  
頭に入っていました。毎年10月  
に開かれる秋の古本まつりは大  
盛況。歩道にまで本が陳列され、  
本好きの人たちであふれ返りま  
す。

古書店巡りの際に、たまに「せ  
どり」をすることもありました。  
せどりとは、安く買った古本を  
他店で高く売って差額を得るこ

とをいいます。安いだけで飛び  
つくとも失敗します。相場は高く  
ても在庫が過剰で買ってもらえ  
ないこともあるからです。

社会人になってからは、大阪・  
梅田のかっぱ横丁などを時々の  
ぞくくらいになりました。その  
分、懇意になった店から送られ  
てくる古書目録を見ては、これ  
はという本が見つかるかと注文し  
ていました。

ここ10年は、アマゾンや「日本  
の古本屋」などのインターネット  
トサイトでもつばら購入するよ  
うになりました。居ながらにし  
て膨大な在庫の中から探せ、た  
いていの本はすぐに手に入りま  
す。その反面、思わぬ本との出  
会い、発見がなくなったのは残  
念です。掘り出し物を見つけた

時の喜びこそ、古書収集の醍醐  
味だからです。

最近では、洋書の古本もネット  
で時々買いますが、日米の文化  
の違いを実感します。日本では、  
本の状態が「よい」とされるの  
は、書き込みがなく、そこそこ  
きれいな本。ところが、米国で  
は、かなり書き込みがあっても、  
一応読めれば「よい」とされて  
いることが多いです。品質、細  
部へのこだわりの違いが、古本  
の評価にも表れています。

この秋、古書店や古本市に出  
かけて、古本を手にとってみて  
はいかがでしょうか。新刊本と  
は違った世界にきつと出会えま  
すよ。

(鈴木隆)

## 日々の色

北の海でたっぷり栄養をと  
り、南下してくる秋が旬のサン  
マ。その水揚げ量が日本有数の  
宮城県気仙沼市を訪ねました。  
リアス式の奥深い入り江。紺碧  
の海に並ぶ白い遠洋漁業船。丘  
陵の深緑。四方に広がる深み  
ある美しさに、思わず、この景  
色を永遠にとの気持ちがあわさ  
りました。水揚げ日本一のカツオ、  
メカジキやカキなども有名です  
が、フカヒレは世界最高の品質  
で、中国のほとんどの高級中華  
料理店でも使われているのこ  
と。伝統的な料理技法なども含  
めて、独自の食文化が育まれて  
きたようです。一方、あの日を  
忘れないとの思いからか、町の  
食堂に震災当時の写真が飾られ  
るなど、厳しい現実にも触れま

## 海と共にスロー、スマートに

した。その気仙沼市が2012  
年に日本で初めて、「スローシ  
ティ」に認定されました。

スローシティとは、特有の文  
化や景観を守るなど、人間ら  
しい、質の高い暮らしを旨ざ  
す町。世界で認定された町は、  
177に広がっているよう  
です。島村菜津氏の近著「スロー  
シティ」では、イタリアにおけ  
る発祥の経緯や、豊かに暮らす  
個性的な町を紹介。高層化や画  
一的な住宅建設などが進んだ町  
が、均質で個性が見えなくなっ  
てないか、スピードと効率の時  
代で、人間が置き去りになっ  
てないかなどの課題意識も示さ  
れ、大切な視点に気づかされま  
す。最先端の技術でエネルギー  
の利用効率を高める「スマート

シティ」などでも、この点に目  
を向けた町づくりに期待です。

気仙沼市は、03年に全国で初  
めて「スローフード都市」を宣  
言。かけがえのない風土と食文  
化を守り、個性的な町づくりを  
行う決意を表明しました。11年  
10月には、復興計画「海と生き  
る」を策定。「スローでスマー  
トなまちとくらし」を目標とし  
て、再建する水産加工団地での  
スマートシティ計画などもある  
ようです。そこには、固有の文  
化を守りながら、未来に向かう  
との気持ちが表示されています。  
そして、市民から提案された言  
葉、海と生きる。凛とした町の  
決意を感じます。

(加賀城 俊正)

## 日々の色

自分の成長とともに、幼い頃の記憶についての理解が変わっていく……。そんな経験はありませんか？

幼稚園の頃、一番仲のよかったお友達と遊んでいて、ふと「今日は早く帰ってきなさい」と母に言われたことを思い出し、急いで帰ろうとしました。ところが、そばにいたその子のお母さんが、「帰ってしまうなら、もうあなたとは遊ばないよ」と言うのです。私は驚き、悲しくて、泣き出してしまいました。

普段は優しいおばさんが、なぜ意地悪を言うのか。当時はそれが分からず、ただ悲しかったという思い出です。年月を経て、私はあの時のおばさんの態度は、少しひどいのではないか、自

## 子供への言葉

分の子供と遊ばないからといって、間違っているのではないかと思うようになったのです。

そして今、わが娘。ちょうどあの頃の私と同じような年になりました。明るい子ですが、お友達と遊んでいても、「私、やめた」などと言ってふらりと別の場所に行ってしまう、気ままな女の子です。その姿を見ていると、「そんなことをしていたら、もうお友達は、誰もあなたと遊んでくれなくなっちゃうよ」。つい、そう言いたくなります。

記憶の中の幼い私は、今のわが子と同じ態度を、お友達に対してとっていたのではないか。一緒に楽しく遊んでいるお友達のことは放っておいて、自分勝手に振る舞ってしまう。おばさ

んは、今の私と同じことを言いたかったのではないだろうか……。理解するのに、二十年。おばさん、長い間悪者にしてしまつて、本当にごめんさい。

これは、心ある人が残した言葉の意味が、後に理解できたという例ですが、違う場合もあるでしょう。後になってある言葉の意味に気づいて嫌な気持ちになることや、深く傷つくこともあるかもしれません。そう考えると、子どもを侮ってはいけな、と心から思います。「今、この子と交わすこの言葉は、いつか大人の知性で理解される時がくる」。そう肝に銘じて、子供たちと接しよう、と思います。

(加茂みどり)

## 日々の色

今日、11月22日は「いい夫婦」の日です。毎年11月中旬に「パートナー・オブ・ザ・イヤー」が発表されます。過去、アスリートの朝原宣治さん・奥野史子さん、ミュージシャン・タレントの高橋ジョージさん・三船美佳さん、野球の野村克也さん・野村沙知代さんといったご夫婦ら選ばれています。

この顔ぶれを見て、いざ自分たち夫婦はどうかと考えてみると、怖くなってきます。30年ほど前に夫婦になりましたが、結婚当初は、毎日会社からまっすぐ帰宅して一緒に夕食をとり、休日は、遊園地などへ外出し、手をつないでラブラブで歩いていました。ところが、年がたつにつれ、飲んで帰宅が遅くなる、

## 今日から「いつもありがとう」

休日は家でごろごろして一緒に外出しない、子どもの教育は任せっきりなど、振り返るととてもいい夫(婦)とは呼べないということに気がつきます。

最近、自宅の寝たきりの父の介護を任せ、彼女の自由時間を奪ってしまい苦勞をかけています。ひよつとしたら来年の定年時には、離婚届を突き付けられ「定年(熟年)離婚」となるのではないかとという不安がよぎります。今からでも遅くない、いい夫婦になるにはどうすればいいのかを考えてみました。

いい夫婦になるための気配り、コツなどいろんな情報が紹介されています。結婚当初のようには手をつないで歩く、1日1回愛すると言う、でもこの年

になると恥ずかしくてできない。共通の趣味を持つ、でもそれがない。結婚記念日や誕生日にプレゼントをする、でも結婚当初はしていたが、だんだんネタが尽きて中止、これも難しい。いやなかなか見当たりません。毎日でき、お金もかからない良い方法はないのか？ 見つかりました。「あ・り・が・と・う」です。日ごろの感謝の気持ちを含めて毎日「いつもありがとう」と言う。これなら恥ずかしくない。今日からでもできる。昨日解禁となったボージョレ・ヌーボーでも買って、心から感謝の気持ちを込めて「いつもありがとう」で乾杯！

(当麻潔)



## 日々の色

フィリピンで発生した巨大台風・高潮の破壊力は、想像の域をはるかに超えるものでした。この秋、相次いで日本を襲った台風も、列島に近づくほどに勢力を増し、各地でかつてないほどの豪雨を引き起こしました。また、やがて起きる南海トラフ巨大地震の被害想定も深刻です。大阪をはじめ、海に向かって高密な市街地が広がる都市は、高潮や津波にどう備えていくか、大きな課題を抱えています。

道路や鉄道、河川、下水などの整備が進み、地形を感知することが難しいほどに建物に覆われた都市の日常。そこに埋没していると、いつのまにかまるで無防備な怖いもの知らずになってしまいます。災害時、地形の中

## 「今昔」で未来を媒介

に潜んでいるリスクを知っているかどうか、私たちの身の安全を大きく左右するはずで、足元に広がるまちが、いったいどんな原型をされていて、どんな特徴を持ち、どのように開発されてきたのか。その履歴を知ることが、いのちを守りまちな営みを持続させていくために欠かせない、基礎体力になるのではないのでしょうか。

大阪のまちの形成は、都心部を南北に貫いている上町台地から始まっています。このたび、上町台地界隈をフィールドにした研究活動の一環で、「上町台地 今昔タイムズ」という小さな壁新聞をつくりました。

自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世

代への伝え方……。「今昔タイムズ」を媒介に、過去と現在を行き来しながら、未来の安心・安全を考えるきっかけになっていけばと願っています。

第1号では「鉄道史から垣間見える、近現代・大阪での都市拡大」を取り上げています。明治時代、大正時代、昭和30年代、現在と四つの時代の地図を見ながら、鉄道網の広がりとともに果てしなく拡張していった市街地の様子をたどっています（詳細はホームページ。「大阪ガス」[U-CORO]で検索を）。

そこにあるリスクを読み取り、いのちを守る力につながっていくべき。

（弘本 由香里）

## 日々の色

もうすぐクリスマスです。日本で「メリークリスマス！」という場合、一般には「クリスマスおめでとう」といった意味で使われています。本来は「アイ・ウィッシュユ・ユー・ア・メリー・クリスマス」を略したものとのこと。アイではなく、ウイで始まる英国の民謡は有名ですね。「楽しいクリスマスを過ごせるよう、お祈りしています」といったところでしょうか。

家族や友人と楽しむ日本流のお祭りも良いのですが、本来の意味に立ち戻って、今年は誰かの幸せを祈り、行動してみませんか。クリスマスには贈り物がつきものです。最近では、親しい人だけでなく、幸せになってもらいたい人に対していろいろ

## 「誰か」のためのクリスマス

な形でプレゼントができるようになっていきます。エシカル消費という言葉が聞かれたことではないでしょうか。エシカルというのは倫理的なという意味です。

チャリティーパーバザーや貧しい国の労働者に適正な賃金を保証するフェアトレードなどでは、自分の欲しいものを購入すれば恵まれない方を支援することができます。このような社会のためになるお金の使い方をエシカル消費や倫理的消費、ソーシャル消費などと呼んでいます。

消費とはモノやお金を使いくすことなので、寄付や募金も立派な消費です。出資（投資）、お金を貸す形で社会課題解決の取り組みを支援する方法もあります。どれが本当に倫理的な使

われ方につながるのを見極めるのは簡単ではないかもしれませんが、しかし、その目を養う努力や経験は自身の生活の質を高める技術を育むことにつながり、決して無駄にはなりません。幸福を論じた先人の多くは、困った人に迷わず手を差し伸べることで心の健康な生き方ができると述べています。幸せの定義は人それぞれですが、知者の言葉には共感できる気づきがたくさんあるように思います。

「本来のメリークリスマス」が少しでも実践されるならば、年末恒例の大騒ぎも心地よい響きとして、前向きにとらえられるのではないのでしょうか。

（豊田 尚吾）



## 日々の色

ここ数年、ゲームやアニメ、フィギュアなどのサブカルチャーの世界で、ジャパンブランドが世界を席巻しています。また、海外でSUUSHIをはじめとするヘルシーな日本食やDAIGINJOなど高級日本酒の人気が高まるなか、昨年は富士山の世界遺産登録に続いて「和食——日本人の伝統的な食文化」がユネスコの無形文化遺産に登録されました。豊穰な文化を受け継ぎ、未来に伝える文化・観光立国として評価され、世界中から熱い視線が注がれるのは誇らしく、心強い限りです。

♪デイスカバー・ジャパン♪  
美しい日本と私♪というコピーで一世を風靡した旧国鉄のキャンペーンが始まったのは1

## 再び、共に「日本発見」

970年。6420万人の来場者で盛り上がった大阪万博の後の旅行需要を喚起するこの企画は、大成収めしました。それから40年以上が過ぎ、当時、雑誌を抱えて萩・津和野などの小京都へ繰り出した若い女性たちや、周遊券を手にも全国を駆け巡った♪カニ族（バックパッカー）たちも還暦・定年を迎えます。この先、膨大な自由時間をどう過ごすのか、本人にも社会にとっても大きな課題です。

元気なうちに旅行を楽しみ、旅行することでさらに元気になれば、一石二鳥です。目的地は名所旧跡に新たな観光スポットや体験型施設も加わって、ほとんど無限。いわば♪デイスカバー・ジャパン・アゲイン♪。老

若男女を問わず、今年は日本の良さを再発見しようとする動きが本格化しそうな気がします。

そこには、昨年初めて1000万人を超え、今年さらに増加が見込まれる海外からの旅行者も合流します。行く先々で顔を合わせ、言葉を交わすケースも増えてくるでしょう。この時、私たちは旅の仲間としてともにもてなされる立場でもあり、一方、遠来のゲストを迎え、もてなす立場にもなります。海外旅行者の目を通して日本を再発見する♪デイスカバー・ジャパン・トゥギャザー♪ができれば、旅の楽しみはきつと倍加することでしょう。

(木全吉彦)

## 日々の色

間もなく立春です。立春、立夏、立秋、立冬は各季節のはじまり。中でも立春は、旧暦では新年にあたる特別な日です。立春の前日、2月3日が節分です。

節分といえば、巻き寿司。今年の恵方は、東北東、恵方は、その年の歳神様が宿るとされる方角です。恵方に向かって巻き寿司を丸かぶりして、一年の無病息災を祈る節分行事は、大阪の一部の地域で行われていたようですが、明治の中ごろには廃れ、20〜30年前に復活し、今では全国の行事となりました。

ミツカンの調査では、恵方巻きの認知度は、2002年53%から06年に92・5%と大幅に伸びました。そして10年調査では、93・8%と微増しています。

## 昔ながらの食と文化 次世代へ

恵方巻きを「切らずに無言で食べる」ことも7割以上の方が存じでした。

節分の行事は、平安時代に宮中で行われた追儺といわれる鬼や邪神を払う行事に、柀鯛や豆まきなど民間行事がまじり、続いてきたものです。柀鯛は、鯛を焼く盛大な煙と臭いで鬼を追い払い、鯛の頭は柀の小枝に刺して戸口に立て、鯛の匂いと柀の鋭い棘で鬼を寄せ付けないというもの。おなじみの豆まきは、硬く煎った大豆を鬼に投げて邪気を払い、数え年と同じだけあるいは、一つ多くの豆を食べるというもの。子どもの頃は、たくさん豆が食べられる大人がうらやましかったものです。

出雲地方では、節分に食べる

そばを年越しそばと呼び、無病息災を祈って食べる習慣が今もあるそうです。他にはコンニャクなども食べられています。コンニャクを乾煎りする盛大な音が鬼を追い払うのでしょうか。

先月、「和食・日本人の伝統的な食文化」のユネスコ無形文化遺産登録が決定しました。日本人の食文化が世界に認められた誇らしい気持ちとともに、和食の現在、そして未来について、危惧している方も多いでしょう。健康、長寿を願って継承されてきたお節料理や雑煮、節分やひな祭りの行事食など日本の伝統的食文化をぜひ次世代にも伝えていきたいですね。

(山下満智子)

## 日々の色

立春後の余寒が厳しい日々ですが、この頃にアラスカへ行つた思い出があります。サンフランシスコ、そしてシアトルを経由し、アンカレッジへ。さらに小型飛行機で、眼下に広がる一面の流氷を見ながらキーナイという場所を訪れました。実は、歴史的に意味のある場所なので、1969年に、日本が初めて受け入れたLNG（液化天然ガス）は、この最果ての地で生産されたのです。最初のLNGを積んだ船が、ここから出港したと思うと、感慨ひとしおで、その史実に思いを馳せました。

60年代の日本は、大気汚染が深刻でした。東京から富士山が見えた日も、歴史上で最も少なく、今年間約130日の6分

## 暮らし守る英断

の1ほどだったとか。燃焼時に煤塵などが出ない天然ガスを輸入する話があったものの、液体にして、タンカーで運ぶ、かつて経験がないもの。投資も巨額で、反対もありました。その時、ガス会社と電力会社のトップが会談し、公害から住民を守るためにも、先を見た決断が必要との思いを強め、実現につながったと言われています。なにか、明治維新における西郷隆盛と勝海舟の会談のような雰囲気を感じた人もいるとのこと。これらの決断が、我が国をLNG先進国へと導き、輸入先も約20カ国へと広げ、青い空や、日本のエネルギーの今を支えています。まさに大局をとらえた先人たちの英断があったのです。

エネルギーは、経済や便利な生活を支えますが、厳冬には体を温め、医療にも使われ、命も支えます。被災地では震災後、久々に給湯器からお湯が出たり、コンロに青い炎がつくと、お風呂に入れる。との歓声や、満面の笑み、感激の涙がたくさんあったとのことです。

今、電力、ガス事業の自由化が議論され、さまざまな企業による競争が進むと言われています。そうであっても、それぞれが、原点として、人々の生活を守り、社会のために英断して、ける志も持ち、エネルギーが支える暖かな暮らしがより良いものとなることを願うものです。

（加賀城 俊正）

## 日々の色

日々の生活に欠かせないコミュニケーション。伝えたいつもりが伝わらなかつたり、意に反して伝わってしまった。苦勞していませんか。

コミュニケーションの捉え方は、大きく二つの型に分けられます。対話型と対話型です。世の中に広く受け入れられているのが対話型。もう一つの対話型を知られば、コミュニケーションでなぜ苦勞するのがよくわかります。

対話型では、コミュニケーションは送り手が意図した意味を受け手へ一方に伝えるものとして、この対話型は、電話で信号を効率的に伝達するために考え出された通信理論が基になっています。よく聞

## 互いにやり取りし合うことで

く「コミュニケーションは言葉のキャッチボール」の喩えは、そうした一方でのやり取りを相互に繰り返す例です。しかし、電気信号とは違って、意味はボールのように送り手から受け手にそのまま届けられるようなものはありません。

一方、対話型は、臨床の現場を観察して見つけ出されたのが始まりです。対話型では、コミュニケーションは送り手と受け手の別なく双方で循環し、意味は受けた側が解釈するものとして、まず、コミュニケーションはしなないわけにはいきません。何もしなくても、伝える意図がなくとも勝手に伝わってしまうのです。例えば、携帯電話に留守電を入れても返

事がない夫に、妻は何かやましいことでもあるのではと訝ります。

また、コミュニケーションは、内容を伝えるだけでなく、同時に当事者間の関係も定めまします。例えば、帰ってきた夫が妻にいつもより丁寧な話すと下手に出ていたということになります。そして、意味はその時のその場の状況に基づいて受けた側が解釈します。例えば、食事に誘う夫の発言に、妻は通常は喜んで、先のような経緯がある。と一層怪しむことになりました。

対話型ではなく、対話型でコミュニケーションを捉えてみてはいかがでしょうか。いろんな気づきを得られると思います。

（鈴木隆）

## 日々の色

食事の習慣で心掛けていることが二つあります。それは「バランス良く……」といった栄養学的なものではなく、心のための習慣です。

一つは、失敗して落ち込んでいる時、試みがうまくいってほっとした時、気合を入れた時、そんな時にチョコレートケーキを食べること。チョコレートではなく、チョコレートケーキが良いのです。チョコレートケーキはチョコレートより手に入れづらいことが多く、特別さが増すからです。その時の気分合ったケーキを買って時間と場所を用意し、ゆったり味わうことが、気持ち盛り上げたり、「今日くらいはいいやん」と甘やかしたり、活を入れ

## 心のための食

てくれるきっかけになります。いつも通りでない気持ちの時に、平常の状態へと切り替える大切な食の「おまじない」です。もう一つは、大切な人と囲む食事の場をできるだけ優先すること。その人との食事の予定が決まれば、前日までにすべきことは前倒ししてでも終わらせ、何日も前からどんな服装をして行くかをあれこれ考えます。そこまで気が回らない時は忙しく、切羽詰まった状況なので、約束を断らないように進めることは大変です。それでも全力を挙げ、すべきことを終わらせ、食事の場に滑り込みます。社会人になりたての頃は、その時間を取りおくことがうまくできなかったのですが、年の功か随分

とうまくなつたと思います。単純に考えて、日に3度、1年にすると1000回以上食事の機会があります。栄養補給、家族や友人とのコミュニケーション、自然の恵みへの感謝など、「食」にはさまざまな意味があります。できれば週に1度くらいは、自分の心をうまく保つきっかけにできる食のシーンを準備できればすてきではありませんか？ なにも大掛かりな仕掛けは必要ありません。日常の習慣で日々を乗り切り、時折、チョコレートケーキでほっとする、そんな暮らしです。

皆さんにとって、元気の出る食べ物は何でしょうか？

(三島順子)

## 日々の色

季節には、春夏秋冬という四季の他に、1年を二十四等分した二十四節気と、これをさらに三区分した七十二候という旧暦があります。この七十二候は、田植えや稲刈りの時期など農作業の目安となる農業暦でもあり、この旧暦をもとに暮らしていた時代には、人々はそれぞれの季節の食べ物や風物詩を楽しみ、祭りや仏事を行なっていました。

七十二候では、3月20日から春分にあたり、太陽が真東から昇り真西に沈み、昼と夜がほぼ同じ長さになる時期で、暑さ寒さも彼岸までといわれる季節の大きな節目のひとつです。今週(3月26日から30日)は春分の次候「桜始開(さくらはじめ

## 旧暦で学び楽しむ

てひらく」と名付けられ、花見が始まる時期とされています。

1週間前の3月21日は、春分の日で前後三日を合わせた七日間が春のお彼岸です。お彼岸には、昔からお墓参りをしてご先祖様を供養する習慣がありました。私も今までお墓参りは、ほとんど妻に任せていたのですが、昨年末父が亡くなり、四十九日までの七日七日の速夜や納骨には妻と一緒にお墓参りに行きました。

久しぶりのお墓で気がついたのですが、今にも倒れそうな墓石があり、また周りに草がいっぱい茂ったのもあり長らく誰もお参りに来ていないと思われるお墓が結構ありました。遠くに住まいを移し、なかなか来られ

ない方もおられるでしょうが、ご先祖様を敬い供養するという習慣がなくなりつつあるのではないかと思いました。納骨で来ていただいた住職も最近の若い世代はお墓参りに行かない人が多いと言われていました。古来、人々が大切にしてきたことを、私たちの世代や次世代の人たちは、学び受け継いでいく必要があるのではないのでしょうか。

自然から多くの恵みを受け、旬の食べ物や祭りをいただき、その季節の風物詩や祭りを楽しみ、仏事も行うという昔ながらの暮らしに学ぶことは多いと思います。この七十二候を参考に、日本の季節を楽しみませんか。

(当麻潔)



## 日々の色

「清水へ祇園をよぎる桜月夜  
今宵逢ふ人みなうつくしき」(与  
謝野晶子)の調べに誘われ、先  
週、京都に出かけました。この時  
期、満開の桜と再会し、誕生日や  
お正月とは違った感じ方で、一  
年を重ねたことを実感した方も  
多いのでは？

「年年歳歳花相似たり 歳歳  
年年人同じからず」。唐の詩人・  
劉希夷の詩「代悲白頭翁」の一節  
です。毎年、季節が巡って同じよ  
うに花は咲くが、それを見る人  
は同じではありえないと、不変  
の自然と人の世の無常を対比し  
ます。中国で花と言えば桃を指  
すことが多く、この詩も、桃と  
李の花が咲き乱れるイメージか  
ら始まりますが、全体のトーン  
は「白頭翁(老人)」がはつらつ

## 移ろいめでる日本の心

とした「紅顔子(若者)」をうら  
やみ、自身が年老いたことを嘆く  
というものです。

日本でもこの時期、同じ頃に  
開花する桜と結びつけて引用さ  
れますが、元の詩の沈うつな雰囲気  
とは異なり、明るい花見の風景  
に陰影を与え、無事一年を過ごし  
て再び春に巡り会えた喜びを感  
じさせてくれる魔法の言葉のよ  
うにも思えます。

「散ればこそいとど桜はめで  
たけれ 憂き世に何か久しかる  
べき」(伊勢物語)とあるように、  
古来から日本人は、すぐに散って  
しまうからこそいつそう桜がい  
としい。この世に永遠に続くもの  
はないと、人も自然も区別なく、  
諸行無常として受け入れる風が  
あります。仏教思想というより、

日本人独特の感じ方——美意識  
なのかもしれません。

「はかない」「うつろい」を愛  
する心は、日本の風土に根差す  
がゆえに、私たちのDNAの中  
に深く刻まれているのではない  
でしょうか。これを感じさせる  
風物、景色を、和食などとともに  
「クール・ジャパン」のメニュー  
に加えれば、より広く、世界に日  
本の魅力をアピールできそうデ  
す。そのためには私たちが日ごろ  
から自然や歴史・文化に親しみ、  
感性を磨く必要があります。これ  
から咲くツツジやボタン、ショウ  
ブ、アジサイ……。これらもめで  
ながら、心に磨きをかけてみたい  
ものです。

(木全 吉彦)

## 日々の色

「三陸鉄道全線復旧」の  
ニュースが、春風とともに全国  
を駆け抜けたのは、記憶に新し  
いところでは。大震災からの復  
興を牽引してほしいとの願いを  
帯びて走る姿に、共感を覚えま  
す。同時に、人口減少が著しい  
地域にあって、ローカル鉄道が  
向き合わざるを得ない、課題の  
数々も思い浮かべずにはいられま  
せん。三鉄のこれからの被災地  
のみならず、わがまち・わが暮ら  
しの未来を重ねて応援している  
方も多いのではないのでしょうか。

日本の社会は、拡大の時代か  
ら縮小の時代に入ってきていま  
す。約100年の間に急増して  
きた人口は、ダイナミックに逆  
転して100年前の水準に戻っ  
ていきます。過疎地だけの問題

## まち支える公共交通

ではありません。これから一気に  
高齢化が進む大都市でも、暮ら  
しをどう支えていくか、問題は  
急激に顕在化してきます。

いったいどんな手を打ってい  
けばよいのでしょうか。縮小する  
社会にあっても、地域の活力や  
生活の質を高めていくには、ま  
ちと人の交わりが豊かに繰り  
広げられていく環境が不可欠で  
す。それを支えるものの一つが、  
まちを舞台に日常の移動を支  
える、公共交通のありようだと  
言ってもよいでしょう。

人々の交通実態を把握し、交  
通計画とまちづくりを生かし  
ていくために、関係機関による  
パースントリップ調査が10年ご  
とに行われています。直近の「第  
5回近畿圏パースントリップ調

査」(2010年実施)の結果に  
は、これまでとは異なる様相も  
表れてきています。

高齢者の外出率には、増加傾  
向が見られます。これは喜ばし  
いことです。しかし、高齢者の  
自動車利用が受け皿となってい  
る現状を考えれば、その先を見  
越して、移動と交流をサポート  
する、公共交通のあり方を工夫  
していく必要があります。

それ以上に、気になるのは、20  
〜30歳代の外出率に、減少傾向  
が見られることです。やがて地  
域の担い手となる若者が、まち  
にかけ人と触れ合う、まちづ  
くりと一体の交通環境が求めら  
れていると思うのです。

(弘本 由香里)



## 日々の色

初鰹が、今回のテーマです。早春に沖縄や小笠原諸島に出現した「カツオ」は、ゴールデンウィーク前後には南日本一帯まで北上、夏には黒潮に乗って太平洋沿岸をさらに北上します。

「カツオ」は、平安時代には既に食用されていますが、「カツオ」と呼ばれるようになったのは1000年ほど前から。腐らないように干し固めて利用され、「カタウオ」と呼ばれ、後に「カツオ」となりました。

生のカツオをゆでて、焙煎での焙乾、カビ付けを繰り返して作られるのが鰹節。昆布と並んで日本料理のだしとして欠かせないものです。昆布のうまみ成分グルタミン酸は、鰹節のうまみ成分イノシン酸との相乗効果

## カツオの季節到来

で、おいしさが何倍にも増します。日本近海で取れる昆布とカツオの出会い、和食のユネスコ無形文化遺産登録の立役者とも言えます。

カツオを刺し身にして食べるようになったのは鎌倉時代以降のこと。庶民だけでなく武士も好んで食べるようになりました。

「目には青葉 山ホトトギス 初鰹」は、江戸時代の俳人山口素堂の有名な句。「まな板に小判一枚初鰹」（其角）と詠まれ、「女房を質においても」と言われるほどの高級魚として珍重されるようになります。ちなみに江戸時代の料理書では、「鰹の叩き」は、鰹の塩辛を意味しています。江戸っ子の好んだ初カツオは、タタキではなく刺し身で

食べられたようです。

皮つきのままさつとあぶった現代の「タタキ」。シヨウガやネギ、ニンニクを薬味にして、同じ頃に出回る新ワカメや新タマネギとも相性抜群です。魚が苦手の子どもたちにもサラダ感覚で喜ばれます。

一方、夏から初秋に三陸沿岸で取れる戻りカツオは脂が乗り、刺し身にすればマグロに匹敵するとも言われます。カツオに含まれる脂質には、DHA(ドコサヘキサエン酸)やEPA(エイコサペンタエン酸)などの不飽和脂肪酸が多く、栄養的にもお薦め。カツオは、初夏から初秋まで長く楽しめますね。

(山下満智子)

## 日々の色

宝塚歌劇が100周年を迎え、その代表作ともいえる「ベルサイユのばら」が、宝塚大劇場で上演されています。

私が母に連れられてはじめて観劇したのは同作品の初演時です。華麗で夢のような世界に、純粋な乙女心は大きな衝撃と感動に震えました。その後、中学や高校に通う頃になると、一人で歌劇を観に行く回数が増え、親を心配させたこともありましたが、少女のもうひとつの学びの場として、他には代えがたい魅力と価値があったと今改めて感じています。

例えば、歌劇作品を通して、フランス革命や大化の改新などにも興味を抱きました。ダンスはクラシック、ジャズから

## 多彩な文化体験、そばに

日本舞踊まで、音楽はタンゴやボサノバ、ロックと幅広く、その観劇体験が、感受性を育て知見を広げてくれました。年齢を重ねるにつれいろいろなジャンルの芸術や芸能に触れる機会ができましたが、宝塚歌劇がその出発点です。

最近では子育てをする中で、ママ同士集まると、宝塚ファンの方と必ず出会います。今まさに憧れのスターがいる人、あるいは昔好きだった人。私の感覚では、5人いれば1人はどちらかに該当します。そんなママは、子供にも実りある経験をさせたいと考えて子育てをしている人が多く、いい刺激になります。

ところで先月、神戸の高校でゲスト講師として授業を受け

持った時のことです。その休憩時間に、一人の女子生徒が「スーパードンパチに行っただ。面白かった！」と興奮して友人に話していました。大阪道頓堀にある松竹座で4月に上演されていた催しのことです。歌舞伎の様式を生かし、現代語で派手な演出もあるエンターテインメントで、私も感動した作品だったので、その生徒の紅潮した笑顔を見てとても嬉しくなりました。

少し足をのびせば、多彩で上質な文化を味わえる関西。大劇場から地域の小さな発表会まで、学生も大人も心に火が灯るような文化体験ができる機会が、もっと増えますように。

(栗本智代)

## 日々の色

いよいよ13日(日本時間)から、サッカー・ワールドカップブラジル大会が始まります。日本チームの初戦は15日の朝10時(同)キックオフです。地球の裏側のブラジルでの開催ということとで、眠れない夜(深夜開催)ではなく、もどかしい朝(試合を見たいけれども仕事や学校に行かなければならない)に悩まされることになりそうです。

ところで、毎年6月は環境月間です。特に昨日5日は「環境の日」でした。環境問題とブラジルと聞いてピンときた方は、かなりエコロジーに関心の高い人でしょう。地球温暖化防止のための気候変動枠組み条約や生物多様性条約が、日本を含む150を超える国によって署名さ

## あれから20年余

れた「地球サミット(国連環境開発会議)」。その開催地がブラジルのリオデジャネイロだったのです。その時には、人類共通の未来のために地球を良好な状況に維持することを目指し、人と国家との相互の関係を規定する行動の基本原則と位置づけられるリオ宣言が採択されました。

当時はかなり大きな話題になりましたが、それはいつのことかご存知ですか。答えは1992年です。サッカー通ならご存じのように、Jリーグが設立されたのが91年。92年にはJリーグの前哨戦となるヤマザキナビスコカップが開催され、93年春にJリーグ開幕、そしてその年秋の「ドーハの悲劇」へと続いていきます。

あれから20年余り。サッカー日本代表はワールドカップの常連になるまで成長しました。また、今や温暖化問題と無関係の暮らしはあり得ません。両方とも私たちにとって大きな関心事に変化してきたのです。今回のブラジル大会でも、新設のサッカースタジアムの基礎工事にリサイクル資材を使ったり、雨水や再生可能エネルギーを積極的に利用したりしているそうです。もうすぐ始まるワールドカップ。試合そのものを楽しむことはもちろん、そんな時の流れを感じながら見るともっと深みが増すかもしれませぬ。

(豊田尚吾)

## 日々の色

6月に入るなり、日本列島は真夏のような暑さで、同時に梅雨入り宣言が1週間ほどかけて全国を駆け抜けました。

6月の別名は水無月。それにしても梅雨時で雨の日が多いこの月がなぜ「水無し月」なのでしょう。調べてみると、これは「水無し」月ではなく、水「の」月の意(広辞苑)なのだそうです。それならば単に「水月」でもよさそうなものですが……。

それはさておき、うつつうしい梅雨が好きだという人は決して多くはないでしょう。しかし、四季のバランスが崩れつつある昨今、昔ながらの季節の移り変わりを味わえる貴重な時期とも言えます。梅雨の合間に少し遠出をすれば、きれいに区画

## 水と緑の国

され、満々と水をたたえて空を映す田んぼに整然と並ぶ早苗の明るい緑が目飛び込んできます。

稲に限らず、この時期、植物は水の恵みを受けて一気に成長し、遠くの高山から町中の街路樹、公園や住宅の庭に至るまで、濃淡さまざまな緑が一年で一番美しく輝きます。

そんな緑を背景に浮かび上がるのが、ハナシヨウブ、アジサイ、アサガオに代表される、青や紫、淡いピンクなど寒色系のきれいな花々です。露をまとったクールビューティーとも呼びたいような、凜としたたずまいに、ひととき蒸し暑さを忘れることができるのも「水の月」ならではの楽しみです。

そして一年で最も雨の多い季節こそ、豊かな日本の自然を支えている水の大切さに思いをはせてみてはどうでしょう。雨は、国土の3分の2を占める森林を育み、地中に蓄えられ、2万本を超す川となって海に向かいます。田畑を潤して作物を实らせ、人のみならず、さまざまな動物の命を支え、栄養分を山から海に運ぶことで近海の魚介をも養います。

今月は環境月間。身近な水と緑に触れて、先人たちがこの豊かな自然環境を守ってきたことに感謝し、今度は私たちが時代に引き継ぐのだという決意を新たにしたいものです。

(木全吉彦)

## 日々の色

海の季節到来です。とりわけ、磯遊びで見つけるカニ、小魚、海藻などの生き物や波音などの自然は心を潤してくれます。海について海洋環境学者の原島省さんたちと対談し、伝えたいと感じたことがあります。

一つは、日本は、思っている以上に、稀有な海の恵みを授かっているということ。黒潮、親潮などの海流や南北に長い地形による気候の多様性があり、実に世界の海洋生物の約15%、海水魚の約25%もの種類が近海に生息しています。古来これらの恵みをいただいて暮らし、昆布だしなど自然の恵みを最大限にいかす食文化も築き、1人あたりの魚介類消費量は主要国で3位。まさに、私たちの生活やア

## 海に感謝し支え合い

イデンティティーを海が形作ってくれたと言えます。

ただ、気になることも起きています。生活の多様化からか、海の目の前の地域でも親が子を海に連れて行かない、海のものを食べさせないなどのことが起き、海のことを全然知らない子供が増えているそうです。また、この数十年で「海のゆりかご」と呼ばれ、魚が産卵し、多くの生物がすむ、国内沿岸の藻場の約4割、サンゴ礁は世界で2割ほど失われているようです。水質汚濁や温暖化等で被害が広がっています。世界の水産物消費量も増え、持続可能性が危ぶまれる水産資源は今や3割とのこと。

豊穡の海に改めて感謝するとともに、海離れや海の危機

はあまり意識されていないのでは、海をもっと知るべきでは、と感じたのです。人は海を愛すると言いますが、少しエゴイスティックで、自分が満たされることだけを見がちなものかもしれません。原島さんは、宮崎駿監督の「風の谷のナウシカ」の次の一節を引用し、警鐘を鳴らしています。「この時代、人は海の恩恵からも見放されていた。海は、この星全体にばらまかれた汚染物質が最後にたどりつく場所だったからだ」。海に影響を与える存在としての私たちのこと、も知り、支え合う未来につなげたいですね。海の日(21日)に海に心を寄せてみませんか。

(加賀城俊正)

## 日々の色

二十四節気では、23日が大暑。名実ともに一番暑い季節の到来です。今年は、梅雨入り前にも最高気温が30度を超える真夏日になりましたが、その時と違うのは湿度の高さです。蒸し暑さが増すので、節電！節電！と思っただけでも、エアコンのリモコンについて手が伸びてしまっています。しかし、エアコンは多くの家庭やビルで使用時間帯が重なりやすく、電力使用量のピークを押し上げる効果が大きいと言われます。体調を崩してまでエアコンの使用を控えるのは本末転倒ですが、リモコンのスイッチを入れる前に、身の回りの工夫をしたいものです。

まず、家庭では日差し対策です。すだれやよしず、オーニン

## 涼を感じる省エネ対策

グ(日よけ)などを使って窓の外側で日差しを遮るのが効果的。窓を十分開けて扇風機も上手に使って風を通すと、体感温度が随分違います。また、五感を通じて涼しさを感じる工夫も有効です。床のラグやマットに、イグサや竹などの天然素材を使ったものを敷くと涼感が増します。見た目に涼しい青系統の色のものを部屋に置いたり、風鈴の適度な音を聞くことも、涼しく過ごすことにつながります。

一方、最近では、移動中の屋外でも空調が利いていたりして、私たちの体そのものが暑さや寒さに対して弱くなっているように思います。元々、私たちの体は季節の変化に応じて、気温に弱

い人は、暑さに強い人に比べて発汗量が少ないために熱が体にこもりやすく、体温調節の機能が弱い傾向があるそうです。汗腺機能を強くするには、ウォーキングなど軽い運動をして、気持ちよい汗を流すことも有効な方法の一つであるとのこと。

また、栄養バランスを考えて食事をしっかり取ったり、風呂もぬるめの湯でゆっくり温まることも、夏を元気に過ごすことにつながります。冷たい食事や飲み物は、取り過ぎないようにしなければいけません。

小さな工夫を積み重ねて、健康と省エネを両立させながら夏を乗り切りましょう。

(志波徹)



## 日々の色

皆さん、小夏をご存じでしょうか。グレープフルーツのような色合いで、それより二回りほど小さな柑橘類です。ここ数年は近くの店舗でも見かけるようになったので、私には「名前と味が一致する」ものでした。先ごろ、その産地の高知を訪れました。小夏の旬は4月〜6月いっぱいだそうで、宿の朝食でも供されました。

柑橘類の食べ方はおおざっぱに言えば、ミカンのように薄皮の中のつぶつぶ（果肉）を食す、ユズのように果汁を調味料に、またはキンカンのように種以外をすべて食す、のいずれかだと思っていました。そのため以前に小夏を購入した際は、ミカンと同様に外皮と白い甘味皮を外

## 小夏の思い出

し、果肉だけ食べました。果肉の外側の袋が薄く華奢なため甘味皮を取るときに破れてしまうので、「おいしいけれど食べづらいもの」と思っていました。

宿では、小夏は食べやすく斜めにそぎ切りにされていたので、スタッフの一人に切り方を教えてもらおうと声をかけました。話すうちに、切り方に秘密があるどころか、実は「一番おいしい白い甘味皮を夏ミカンなどと同様に残してしまっていた」ことが分かり、「白いところが一番おいしいのに」「もったいない」と口々に言われました。「甘味皮と一緒に」の注意書きを見落としていたのです。

「お土産にしたい」と話し込んでいると、宿からそれほど遠

くない青果店を薦められ、「宿

で自転車を借り、地図をもらってすぐに出かける」というプランがあつという間に決まりました。あの時声をかけていなかったら、おいしい食べ方を知らないまま、翌日の朝市ではたくさんある店のどこで買うのがいいのか迷っていたかもしれせん。

旅から戻り、「ぜひ、甘味皮ごと」と友人たちに配り、自分も食べながら旅先で出会ったふれあいの温かみを思い出し、楽しんでいきます。小夏は私の訪れた土地の思い出と、出会った人の親切さの思い出になりました。今年の夏休み、皆さんにもそんな出会いがありますように。

(三島順子)

## 日々の色

共働きの子育て家族について、調査をしたことがあります。子どもが自分の食事くらしい作れる年齢の家族や、妻がパートタイムで週に2日ほど働いている、という場合は、そんなに家事や育児の負担感がありませんでした。しかし、食べ盛りの男の子を含む複数の子どもを持つ家族や、子どもが手のかかる幼児である場合、その負担がかなり大きいことが分かりました。

「米を8合炊いても、食事2回分に足りない」「卵が20個あってもすぐなくなり、夫婦交代で買いに走った」「毎朝茶を5リットル沸かす」「忙しくてドラマなんか、何年も見ていない」「洗濯物も山ほどあるし、子どもが泣いて家事が進まないのに、翌朝も早い

## 安心して預けられる社会に

し」。まさに時間との戦いです。少し前、シッターに預けた子どもが犯罪に巻き込まれる悲惨な事件がありました。なぜ預けたのかという意見もあり、さまざまな考えもあるのでしょうか、ワーキングマザーの私も、シッターサービスなどを利用して今の生活を成り立たせている、というのが正直なところだと思います。

しかしながら、先の調査で聞いてみると、そんなに大変な状況なのに、サービスの利用を躊躇している場合もありました。セキユリテイやプライバシーが担保できるのか不安、というのが主な理由です。経済的な理由もあるかもしれませんが、就

少子高齢化の進行に伴い、就

労人口は減っていきます。女性も労働力として期待される時代です。リーズナブルに、安心して子どもを預けることができるサービスの増加に心から期待したいと思いますが、住まいの側の工夫も一つの提案があります。部屋の一つに外から掛けられる鍵をつける。貴重品はすべてその部屋に入れ、サービス利用の時には鍵をかける。こうすれば、安心してサービスが利用できる、あらゆる疑いをシッターさんにかけて済みます。

事業者側と利用者側が、少しずつの工夫をして、安心して働き、育てることができるような社会になればと思います。

(加茂みどり)



## 日々の色

お盆を過ぎて、朝晩は秋の気配も感じられるようになってきました。これから、住宅リフォームは秋の最盛期を迎えます。実は、その立ち上がりの時期が、気温の推移で分かるのです。

かつて住宅リフォーム会社を紹介するビジネスをしていた時に、発見しました。リフォームは、7月半ばから8月のお盆にかけて、申込件数が大きく落ち込みます。そして、盆明けから再び増えだします。ところがある年、お盆を過ぎても横ばいのまま推移し、申し込みが増えませんでした。市場が変調をきたしているのか、集客に何か問題が発生したのかなど、気が気ではありませんでした。9月に入りようやく猛暑が一段落した途端、一気に申し

込みが増え、例年のペースに戻りました。

もしやと思い、数年分の気温と申込件数の推移をグラフ化してみました。最高気温が下がり始めると申し込みが増えていました。例年は盆明けあたりから最高気温が下がり始め30度を切る日も出始めます。ところが、猛暑の年はお盆を過ぎてもまったく下がらず、9月まで35度以上の猛暑日が続いていたのです。暦の時期よりも最高気温の方が、申し込みの立ち上がり時期に強く関係しているようです。うだるような暑さの中ではリフォームどころではありません。暑さが一段落すると、リフォームをする気になり始めるといふことのように、その後の別の猛暑の年も、

同様でした。

住宅リフォームは、12月初めから年末年始にかけても、申込件数が大きく落ち込みます。申し込みの立ち上がり時期は、1月の松が明けた、関西では15日ごろからです。こちらは厳冬の年も、申し込みが増え始める時期はさほど変わりませんでした。最低気温はあまり関係していないようです。

今夏の最高気温は、ほぼ平年並みで推移してきました。季節を表す七十二候では「天地始肅」となり、天地の暑さがようやくおさまり始める頃となりました。そろそろリフォームを検討する気になっていませんか。

(鈴木隆)

## 日々の色

毎月12日は「パンの日」です。江戸時代末期、外国軍が攻めてくるのに備えるため、米飯の代わりに、日本で初めて「兵糧パン」と呼ばれるパンを本格的に作ったのが1842年4月12日だったことに由来します。

30年ほど前に、関係会社がフランスの会社と提携してパン事業を始めるといって出向しました。まずは、フランスに飛びパン修行です。工場や店で研修を受けながら、フランスのパンを食べ歩きました。最もおいしいと感じたのはバゲットという、いわゆるフランスパンです。小麦粉、塩、イースト菌そして水というシンプルな材料で作ります。本来の小麦粉の味が味わえる本当においしいパンです。フ

## シンプル・イズ・ベスト

フランスには、クロワッサン、ブリオッシュなど、砂糖、バターや卵などを使ったたくさん種類のパンがありますが、シンプル・イズ・ベストです。

日本でも同じような小麦粉製品にうどんがあります。うどんも小麦粉と塩と水のみで作りますが、その食べ方はいろいろです。きつねうどん、鍋焼きうどんなどがありますが、私が一番おいしいと思うのは「生醤油うどん」です。うどんをゆでた後、水洗いし、井に入れ、醤油を少し入れて食べます。これもフランスパンと同様に小麦粉本来の味とうどん独特のコシとねばりを味わえます。これもシンプル・イズ・ベストです。シンプルすなわち「素」が良いのです。

これは、人にもいえると私は思っています。最近ヒットしているデイズニー映画「アナと雪の女王」の挿入歌「レット・イット・ゴー」の「ありのままの……」のフレーズがよく流れています。着飾ったり、ぶりっするのではなく、日ごろの「ありのままの自分」、「素の自分」を見せれば良いのだと思います。ただし、そのためには、ありのままの、素の自分をもっともっと磨く必要があります。知性、言葉、考え方、コミュニケーション力、磨くものはいろいろあります。これからも自分を磨くことを意識していきたいと思えます。

(当麻潔)

1995年の国勢調査で、65歳以上が人口に占める割合が14%を超え、「高齢社会」と表現されるようになった頃からでしょうか、新聞・雑誌や書籍などで「林住(棲)期」という言葉をしぼしぼ目にするようになりました。これは、古代インドにあった教えで、人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」の四つの段階に分けて捉え、三つ目にあたる「林住期」は、「孫ができる年齢に至れば、家を出て森林に隠棲して修行をしない」といった意味です。

直近の推計で65歳以上の人口は25%を超え、「林住期」のイメージは、20年前よりもずっとリアリティーをもって受け止められるようになってきました。

### 第3の人生 どんな「林」で

さて、人生の第3期の舞台に、どんな「林」を選んでどんな暮らしをするか。思いを巡らし、準備にいそしんでいる方も多いのではないのでしょうか。

ところで、2013年に実施された住宅・土地統計調査の結果(速報)が、この夏に発表されました。全国の住宅総数に占める空き家の割合が、過去最高で13・5%に達したとされています。なかでも近畿大都市圏は、関東・中京大都市圏と違って、空き家率が全国平均を超え、13・9%に上っています。放置されてしまうと、危険をはらんでやっかいな空き家ですが、活用すれば人生の第3期の舞台にもなる、貴重な資源です。

私の身近にも、都市部の自宅

とは別に、中山間地の古民家を手に入れて、心身を耕す「林」にしている人がいます。家族から少し離れて、ほどよい距離を保ちながら行き来をする暮らし。老いや死や孤独を恐れ過ぎず、楽しみに転じる力を養っているようにも見えます。

かくいう私も、祖父母が遺した空き家の掃除・草取りに通い続けてはや10年になります。山肌(やまはだ)に寄り添う小さな建屋には、蜜蜂(みつばち)や蝸牛(かたむね)や蛇(へび)や沢蟹(さわがね)、ときには狸(こね)まで、たくさんの生命が集ってきます。生き物たちの豊かさに圧倒されて、人間の小ささに気づかされる、「林住期」に向けたレッスンのようです。

(弘本 由香里)

26日に迫った大阪マラソンに備えて毎週末、自宅周辺を走っているのですが、そろそろ暑さ対策より寒さ対策が必要になります。これまでは1時間ほどのジョギングだったのが、今や4時間を超える本格的なランニングになってきました。

3年前の第1回大会では競争率8倍という狭き門をくぐり抜けて「チャレンジャー」(8・8キロ)に出場し、御堂筋を逆走する快感を味わいました。「次はフルマラソン」と翌年、翌々年に申し込みましたが抽選ではじかれ、今回、追加抽選でやっと出場にこぎつけたのです。

私がジョギングを始めたのは東京に赴任した2006年、51歳でした。総コレステロールや

### リフレッシュ まずは散歩から

中性脂肪の値が高く、生活習慣病のリスクが高いと脅かされましたし、赴任当初は单身生活だったので、食事が不規則になり栄養バランスを失うおそれもありました。ちょうど、地井武男さんのTV番組「ちい散歩」も始まり、初めての東京を自分の足で見て回ろうと、家の周りの散歩から始めたのです。

公園、大学、商店街……目的の地はいくらでもあり、デジタルを片手にあちこち歩くことで心身ともにリフレッシュしました。体重、体脂肪率もじわじわ下がり、身体が軽く感じられるようになったある日、緩い坂道を下りて行きながら、ほんの気まぐれに、一方の足が着地するのを待ちきれず、もう一方の足

を地面から離してしまったのです。1歩、2歩……散歩がジョギングに変わった瞬間でした。

30分ほど走ると「ペースに乗る」というのか、身体が楽になります。意識も今ここで走っている自分から離れて、自在に時間・空間を飛び越え、普段忘れていた昔の出来事を懐かしく思い出したり、モヤモヤしていた悩みごとが、すつとほどけたり、走ることの効用は健康増進だけではなくのように思います。

始めるならこの季節がベストです。まずは、歩幅を広めにして散歩することから。見慣れた景色の中に季節の移り変わりをを見つけるのも楽しいものです。

(木全 吉彦)

## 日々の色

「オーナーが殺された！ 犯人は、ここにいる誰かだ」

大阪のレトロビルで繰り広げられる殺人劇。大阪の小劇団「P・T企画」が提供するオリジナルサスペンス劇を体験してきました。一番の魅力は、観客が、殺人現場に残されたヒントをもとに謎解きに参加できることです。登録文化財に指定されるような近代建築が会場なので、古めかしい狭い階段や雰囲気のある小さな部屋、地下まで、普段は入れない空間で犯人を捜すという推理タイムは気分が高揚しました。劇中のキャストが、直接話しかけてヒントを与えてくれるのもドキドキします。

観客が各々の推理を解答用紙に記して提出した後、名探偵が

## 謎解きラリー 船場で

真犯人を明かします。「容疑者の中でこのビルの設計をよく知らない者が犯人だ。それはお前だ！」。迫真の演技と巧妙に仕掛けられたトリック。生活空間に意外に近いところで非日常を楽しめたのが新鮮でした。

この「P・T企画」が監修した謎解きが、まち歩きイベントとして、大阪船場地区にお目見えしました。船場では、近代建築の魅力を多くの人に知ってもらうという活動が続いており、今秋は「古典芸能×近代建築で船場を遊ぼう！」という事業が、中央区役所主催で11月24日まで開催されています。その目玉が、謎解きラリー「センバ探偵団『ゆめまるくんと消えたお宝を探せ』」です。

ミッションは、山本能楽堂の家宝の掛け軸を盗んだ犯人を捜し、お宝を取り戻すこと。中央区のマスコットキャラクター「ゆめまるくん」の絵とヒントが書かれた掲示板が、同区内の近代建築やホテルなど20以上のポイントにあり、うまくいけば4ポイントで謎が解けるといって仕掛けです。地図付きの赤茶色のチラシが区役所や山本能楽堂、青山ビル、ガスビルなど各ポイントに置かれてあり、応募すればプレゼントが当たります。

まちぐるみで取り組む手作り感も味わいとなって、船場をより身近に感じられる貴重な機会です。トライしてみませんか。

(栗本智代)

## 日々の色

芸術の秋とは言うけれど、高尚すぎるのはちょっとハードルが高いという方にお勧めがあります。天保山にある大阪文化館で開催中の「光と影の芸術人 藤城清治世界展」です。先日、妻に誘われて行ってきました。

影絵といえば藤城清治さんというくらい有名なので、改めて紹介する必要ありませんが、「暮しの手帖」やカルピスのCM、銀河鉄道の夜など、誰もがどこかで目している作品の作家です。筆者と同年代の50歳くらいの方なら木馬座アワーの「ケロヨン」をテレビで見ている人も多いでしょう。その藤城さんの原画展で出会う2000点を超える作品群は芸術そのものです。しかし、決して雲の上の

## 懐かしい影絵の世界

存在ではなく、とても身近で懐かしい思いに浸ることのできる空間をつくりだしています。

影というのは不思議な存在です。光と影という比喩を使う場合には、光がよいこと、影が悪いことのように表現されることが多いように思います。しかし、影があるからこそ光が際立ちます。それだけでなく影そのものからも多くのメッセージが伝わってきます。

例えば影絵は輪郭しか見えないため、想像を加えるという自由度が高まります。それは特に子供にとって愉しく印象に残る行為なのではないでしょうか。幼い頃見た影絵が記憶に残っているのもそのためで、だからこそ懐かしさ、ノスタルジアを感じる

じるのではないかと勝手に理屈づけています。

ノスタルジアには前向きな感情を喚起する、社会的な絆を強化する、自分の人生が意味あるものだと感じさせるといった機能が存在するとの研究もあります。藤城さんの作品はそんな懐かしい、愉しい、何かを感じる影を見せてくれます。展覧会で紹介されている「泣いた赤鬼」で、青鬼が赤鬼に残した手紙を読んだ時にはグツとききました。

大阪の原画展は12月7日まで開催です。家族、恋人、友人……大切な人と一緒に見に行ってみませんか。きつと心が豊かになると思います。

(豊田尚吾)



11月22日は「いい夫婦の日」では、24日は何の日かご存じでしょうか？ 正解は、「和食」の日、いい日本食の日です。昨年、和食のユネスコ無形文化遺産登録に向けて「和食」の日として登録されました。今年も農林水産省や「和食」文化の保護・継承国民会議（和食会議）会員の企業や団体を中心に、11月を和食月間としてさまざまな活動を展開しています。

日本は南北に長く、四方を海に囲まれています。日本列島の南方からは、暖流系の黒潮が北上し、太平洋側では、三陸沖で寒流系の千島海流に出合い、日本海側では、対馬海流となつて北海道沖まで北上します。そのため日本は、太平洋側、日本海

## 郷土料理、守り伝えて

側、北のオホーツク海側、南の東シナ海側、瀬戸内、さらに内陸部と沿岸地域で、気候・風土を異にします。春夏秋冬、四季折々、列島沿岸では魚介類や回遊魚が豊富で、栽培される畑作物や山菜にも地域による特徴があります。外国に比べ四季の移ろいが食材・産物においても明瞭だと言われる所以です。

土地の食材・産物を使っておいしい料理を作る、その知恵の積み重ねが各地の料理の原点となり、地域文化としての郷土料理を発展させました。郷土料理は、長い年月、加工品や保存食、そして冠婚葬祭におけるご馳走としての役割を担ってきました。食の均一化が言われる現在も、正月の雑煮の餅の形や具、す

まし汁か、白味噌か赤味噌かなど、多様性がまだまだ残されています。これらの和食文化を大切に保護して、次世代の子どもたちにも継承していきたいものです。しかし現状は厳しく、このまま何もしないでいると、和食が消滅してしまうのではないかと危惧されます。

ユネスコの無形文化遺産には、登録国と国民に保護・継承の義務が課されます。登録から6年後、東京五輪前には第1回のユネスコ審査があるそうです。和食会議は、さらに本格的な和食の保護・継承事業を計画し、趣旨に賛同する企業、団体、個人を募集しています。

（山下満智子）

先ごろ、独り暮らしの高齢の方がテレビに映りました。足を悪くし、窓から、緑がまばゆい木々に語りかけたり、「お月さんが見えるじゃないの。お月さん、ありがとう」とつぶやき、真っ白の新しい靴を眺め、外を歩ける日を願っていました。介護サービスによる外出も楽しめないとのことで、一度でもお手伝いできればとの思いもよぎったのです。超高齢社会に向かう日本。2035年に高齢世帯は4割を超え、うち、独り暮らしは38%になる予想があります。

これからの取り組みを考えていくために、私が訪ねた岐阜市の芥見東自治会連合会をご紹介します。向こう三軒両隣の精神で、4〜8軒ごとに「見守り愛

## 小さな手助けつなげ

チーム」を作り、高齢者の見守りや小さな手助けを始めていました。感銘したのは、お互いに負担とならないよう、頼まれごとと以外は干渉せず、大きな手助けはしないなど、個人を尊重した、緩やかなつながりを築いていたことです。緑あふれる坂道を下りてきたコミュニティバス「みどりっこ」では、中学生もヘルパーに挑戦。高齢者の乗降などを手伝い、和やかに会話して、黄色の車体からは幸せがあふれているようでした。

実は高齢化を考えるある会合で、大阪の主婦の方々からも「一人では負担だけど、地域で協力し、できる形で高齢者を見守れたら」と、緩やかなつながりへの期待を聞いたのです。

各地のコミュニティを巡ると、つながりには「楽しさ」が引力となるようです。先の地域でも、ゆるキャラの「みどりっこちゃん」や、「みどりっこ音頭」づくりなどで盛り上がりがありました。田植えなどで協力した昔の共同体「結」でも、歌や料理で楽しませる役割の人たちがいたそうです。世界に先駆け進む超高齢社会。振り返ると、日本には古より和の精神があります。形は変えても、未来を照らすと信じます。できないこともたくさんあるでしょう。でも、できる小さなことが、互いの心も温めるかも。考えてみませんか、つながりの温故知新を。

（加賀城俊正）

## 日々の色

12月22日は冬至です。本格的な冬はまだこれからで、「厳しい寒さが続く」と思うと気持ちに沈みがちですが、心の持ち方で、少しでも前向きに冬を乗り切れることもできるのではないのでしょうか。

冬至は、一年のうちで最も太陽が南に下がり、昼の長さが一番短い日。旧暦の時代には太陽の影を観測して、冬至の日を決め、暦の基準としていたそうです。また、今年の場合は、月の満ち欠けについても、基準といえる新月をこの日に迎えます。このように、冬至と新月が重なるのは19年に1度のことです。「朔旦冬至」と言われます。これは、暦が正常に運用されたことを示すものでもあり、とてもめでた

## 冬至より春を待つ

いこととして、祝いの儀式が行われていたようです。

つまり、この冬至を境に昼の長さは徐々に長くなり、極限まで弱まった太陽が復活していく、さらには、上昇運に転じるとされています。

また、中国では古来、「九九消寒図」というものが使われていました。9枚の花弁がある花が9個書かれた図です。冬至の日から、1日に1枚ずつ花弁を塗っていくと、81日ですべて塗り終わり、その時期には、初春の啓蟄の頃になっていくというものです。他にも、9画の漢字を9個並べ、1日1画ずつ書いていくと、春を待つ一句ができあがるものもあるそうです。

これらは、「また今日も寒い」

と思うのではなく、「昨日よりも運が強くなっている」とか「もうこれだけで寒さがなくなる」と思うことで、前向きに捉えることもできるという昔の人の知恵ではないかと思えます。

さらに、冬には冬にしかない楽しみもあります。ウインタースポーツを楽しんだり、家族や仲間と鍋をついたり、温泉地や雪まつりに出かけたりといった楽しみも冬ならではのことでしょう。冬至には、ゆず湯につかる風習もありますが、風呂でゆっくり温まるのもよし。寒くてつらい冬と考えず、少しでも前向きに捉えることで、冬を乗り切りたいと思います。

(志波徹)

## 日々の色

私は京都の古い町家で育ちましたが、近年、マンションで暮らし始めて実感したのは、そこが外から遮断された閉空間だということ。雨の音などが聞こえず、室内にいますと、外の様子や天気が変わりません。

町家暮らしは、過酷な部分もありました。まず冬の寒さが半端ではありません。隙間風もひどくて、室内の温度は外気温とほぼ同じ。大きな音を立てると、隣家にも聞こえます。一方で、雨音や風鈴の音が聞こえ、風情のあるものでした。父の帰宅は、表の道路で車のブレーキがかかる音で分かりました。

もともと、温暖な気候の日本の暮らしは、屋外との親和性が高いものです。風を通し、快適な

## 季節を感じる住まい

空気を室内に取り入れ、多少暑くとも寒くとも、季節感の感じられる生活を楽しむことができました。それには、日本の伝統的な家屋には普通に存在する、土間や縁側のような外と内の中間的な空間の寄与するところが大きいと考えられます。

大阪ガスの実験集合住宅NET XT21では、集合住宅にこのような中間領域を提案しました。断熱に対する時代の要請に応える性能を確保しつつ、外部空間を身近に感じ、季節を楽しめる生活を実現する。そのために、外部空間と室内空間の重なり合う部分を「中間領域」とし、その屋外側や室内側を建具で仕切って開閉できるしつらえとしました。開閉によって、ある時は室

内のように、ある時は屋外のように使える空間です。

このような試みをする、空間を仕切る建具にも、日本には多くのバリエーションがあることに気づきます。半分だけ開けられる無双窓。障子部分を取り外すと、格子戸になり風を通せる大阪格子戸。一部をガラス戸にできる雪見障子。普通の障子戸も、光をやわらかく取り入れながら、視線をさえぎることが出来ます。視線と光、風と熱。その通し方にも日本の居住文化の豊かさが感じられます。季節感のある暮らしが、ぜひマンション生活にも、広く取り入れられていけばと思います。

(加茂みどり)

## 日々の色

15日に、近くの氏神様のごとんど焼きにしめ縄や箸紙などの縁起物を持って行きました。これを済ますと正月が終わった気がします。皆さんはどのように正月を過ごされたのでしょうか。

私の正月は前年末にしめ縄やウラジロといった正月飾りと、お節料理の材料を購入することから始まります。いつの頃からか、お節料理を調理するのも私の仕事になりました。大晦日だけの調理で、寸胴鍋に一杯、だしを引くことが始まりです。材料を下げしえし、煮しめ、頃合いに冷めたものを保存容器に移し、鍋を洗い……を繰り返し、引いただしが鍋の半分になる頃にお節作りは終わります。

毎年作っているものの、母か

## 新たな食との出会い願い

ら受け継いだ味付けだけでなく、友人から教えてもらったり、料理本を参考にしてみることも楽しいのです。例えば、今回は田作りの味付けを変えてみました。結果はいつもどおり、母は「おいしい」と、父は「今までの方がいい」との反応でした。

そんな私には、あるリサーチ会社が昨年11月に行った調査は驚きでした。「来年(2015年)のお正月を家族や親戚の方と祝う予定がありますか。同居の家族・親戚以外も含めてお答えください」の質問に対し、「予定がある」が全体の半分、さらにお節料理を食べる人は78%というものです。まだまだ正月といえはお節料理なのでしょう。しかし、すべて手作りは14%、何らかを

外から調達する人は81%。いつの間にか、手作りの自分が少数派であることを数字で実感させられもしました。

さて、お節料理や雑煮などは土地ごとに具も味付けも異なり、隣のお節料理は我が家と同じではないものです。子どもの頃は転勤族の多い環境であり、正月明けに友人宅に遊びに行くと珍しい正月料理を見かけたり、ちょっとごちそうになったりもしました。大人になった今は友人たちと互いに持ち寄ったお節料理と久しぶりの会話を楽しみます。今年もそんな会食と、新しい食べ物との出会いがあればいいと願う年初となりました。

(三島順子)

## 日々の色

今年2月4日に立春を迎え、ようやく春の気配も感じられるようになってきました。冬来たりなば、春遠からじ。昔、英語の授業で習った「winter comes, can spring be far behind?」の日本語訳が思い浮かびます。英国の詩人シェリーの「西風に寄せる歌」の一節です。今冬は、当初の暖冬予想とは裏腹に、寒波と大雪に見舞われました。

週末によく登っている京都西山のポンポン山(678m)でも、1月2日の朝には山頂付近は30cmほどの積雪となっていました。未踏の白雪を踏み締めるのは、なんといっても爽快です。身近に雪山気分を楽しめました。

## 宝探しに春山へ

3月になると、新春を祝うという意味の福寿草の花が咲きます。3〜4cmの黄色いかれんな花です。ポンポン山から北へ延びる尾根道をしばらく行った急な斜面に、ひっそりと群生しています。注意して見ないと見落としてしまいますが、斜面一帯はロープと柵でしっかり保護されています。ボランティアの人たちが、鹿が踏み荒らすのを防いでくれているのです。

さらに4月になると、春の妖精といわれるカタクリの花が咲きます。花弁は5cmほどで、薄紫色をしており、下向きで放射状に裂開し、日が当たると上向きに反り返ります。発芽してから開花するまで8年ほどかかります。しかも、地上に姿を現す

のは年に1カ月余り。後は葉も落とし球根だけで休眠するのが妖精たるゆえんです。ポンポン山の山頂近く、柵で囲われた傾斜地で見ることが出来ます。こちらは尾根道沿いにあり、見落とすことはありません。隣の小塩山(642m)の近辺まで足を延ばせば、そこかしこに群生しています。

例年よりもかなり寒かった今年、福寿草やカタクリの開花時期が少し遅くなるかもしれません。開花のタイミングを見計らって近くの山へ登ってみるのも、宝探しのようで楽しいものです。

(鈴木隆)



## 日々の色

今日は「アレルギーの日」です。日本アレルギー協会により制定された記念日で、日本の免疫学者が花粉等のアレルギー源を発見し、2月20日に発表されたことに由来するそうです。実は、私は「花粉症」と「薬物アレルギー」の二つのアレルギーを持つています。

花粉症については、年中その症状が出て薬が手放せません。スギやヒノキの花粉が飛ぶ春先、ブタクサの花粉が飛ぶ秋は、薬を飲んでいても、くしゃみ、鼻水、目のかゆみといった症状が出ます。車を運転中のくしゃみは一瞬目をふさぐため、ヒヤッとした時もあります。アレルギー検査をしたところ、花粉だけではなく、ダニやハウスダ

## 暮らし見直し、アレルギー軽減

ストにも反応するそうです。この花粉症は遺伝するようで、私の娘も症状が出て薬を飲んでおり、我が家の医療費はかなりの額となっております。

もう一つの薬物アレルギーは、特定の複数の薬に反応し、じんましんが出たり、気分が悪くなったりします。風邪などで処方される薬は限定されます。

この二つのアレルギーは、大学生になる頃から症状が出てきました。空気のきれいな奈良から大阪に通学し、また就職で生活パターンが大きく変わったのが原因の一つかもしれません。

では、対策はどうすれば良いのか。これは私の研究分野である地球温暖化問題と同じことが言えると思っています。温暖化

対策には、省エネ等の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)排出削減策である「緩和策」と、農作物の栽培時期の変更等温暖化の影響を軽減しようという「適応策」があり、最近はこの適応策の議論が活発に行われています。アレルギーも、治すことは極めて難しく、適応策で対処していく必要があると思っています。

間もなくスギ花粉が飛ぶ季節になります。規則正しい生活、バランスの良い食事、暴飲暴食をしない、部屋の掃除、運動など、日々の暮らしの見直しで、できるだけ薬に頼らないアレルギーとの付き合いをしていきたいと思っています。

(当麻潔)

## 日々の色

寒さも和らぎ、ようやく春がやってきました。春野菜のシーズン到来です。冬野菜の大根やカブラは、春に花が咲き種をつけるために、寒さのピークを過ぎると味が落ちます。野菜売り場には、山菜や菜の花が並び、タケノコやウド、フキ、グリーンピース、新キャベツや新ジャガ、新タマネギと日ごとに春野菜の種類が増えてきます。

春一番に登場するフキノトウは、日本原産の多年草で、古くから親しまれてきた山菜です。独特の風味とほろ苦さが特徴ですが、大きくなると苦みが強くなり過ぎます。つぼみがまだ固い小さめのものを選び、水にさらしてアクを抜き、天ぷらやフキ味噌にすれば、「これぞ春」と

## 春野菜にほころぶ

感じさせる一品になります。

そして何といても代表的な山菜はタラの芽。山菜の王とも言われます。新芽の根元の固い部分を除いて、はかまを取り、天ぷらやおひたし、あえ物にします。早春に出回る栽培ものは、天然に比べてアクが少なくマイルドですが、香りも控えめ。ちなみに山菜の女王はコシアブラとか。いやコシアブラこそが山菜の王という説もあります。

手軽に春らしさを取り入れることのできる野菜といえば「菜の花(なばな)」でしょうか。香りとほのかな苦みが特徴ですが、ゆでてお椀や煮物に添えても、辛子醤油であえても、いつもの家庭料理を一段格上げすることができます。なるべく花が

咲いていない若いもの、切り口が茶色くないものを選びます。ゆでる前に水に放ちシャッキリさせてから使うのもおいしく料理するコツの一つです。

この「菜の花」、実はアブラナ科の植物の花の総称で、菜の花という単独の野菜はないそうです。家庭菜園の大根やブロッコリー、小松菜に咲く花もみんな菜の花なのです。市販されて私たちが食用にするものは主に「菜種」の花、油を搾ることからアブラナとも呼びます。

早春に出回る春野菜は、少しアクと苦みがあるのが特徴です。冬の寒さに縮こまった心と体をリフレッシュしてくれます。

(山下満智子)

大阪の将来像が問われる2015年。奇しくも近代の大都市「大大阪」が誕生してから、ちょうど90年を迎える年です。

明治22（1889）年、大阪市制がスタートしたとき、市の面積は15・27平方キ。江戸時代のコンパクトなまちが原点でした。それが大正14（1925）年の第2次市域拡張で、周辺の村々、現市域の大半を編入して、181・68平方キへ、一気に拡大したのです。

この時点から昭和初期にかけて、大阪市は面積・人口ともに全国一の大都市となり、「大大阪」と喧伝（けんでん）されました。地域にのみ込まれていった田園地帯では、河川改修や耕地整理が進められ、鉄道が延びていき、あつ

## 大阪繁栄の土台、記した画家

という間に住宅や工場が建ち並び市街地が変わっていったのです。かつての風景は、今では幻のようにさえ感じます。

近世の名残をとどめていた明治の大阪が、大正・昭和へ「大大阪」の開発の足音とともに変貌していく瀬戸際の風景を、しっかりと見つめ記録した画家がいます。堤橋次郎（つゐしろう）さんといえます。明治29（1896）年、旧鶴橋村生まれで、大阪市東部、鶴橋・猪飼野（いかいの）界隈に暮らし、日本画家・郷土史家として貴重な歴史資料ともいえるべき作品群を残しています。

「大大阪」喧伝の時代にあつて、表面の華やきよりも、繁栄を下支えしている生業や交通のありよう、そして発展の一方で

失われてゆく風土こそ、目を向け後世に伝えるべき対象と捉え、足を運び筆をふるう。郷土と人々の暮らしへの深い愛と使命感が伝わってくるようです。

作品群は、孫の堤條治さんが大切に管理され、郷土史研究に取り組む足代健二郎さん・小野賢一さんが、志を受け継ぐように、橋次郎さんの作品をめぐる研究と紹介に力を注がれています。その思いに接して「上町台地 今昔タイムズ」4号で、橋次郎さんの作品に時代の証言を重ねた特集をしています。ホームページにて「大阪ガス」上町台地 今昔タイムズ」で検索してご覧いただけます。

（弘本 由香里）